# SAPPORO 教区 NEWS

第31号
2020年４月30日

発行：カトリック札幌司教区事務局広報部
〒060-0031 札幌市中央区北１条東６丁目10
Tel.011-241-2785／ホームページ：http://www.csd.or.jp


## 主のご復活をお慶び申し上げます
## この困難を乗り越えられるように、ともに祈りましょう

### 札幌教区の皆様へ

司教　勝谷　太治

**十　困難に直面する時、常に私たちと共にいてくださる主が、私たちを祝福し、必要な助けを与えてくださいますように。**

今年の四旬節、聖週間はバチカンをはじめとして、世界中で過去に前例のない全ての典礼を無会衆で行なうという事態となりました。日本においても新型コロナ肺炎の感染拡大は一向に治まる気配はなく、むしろ都市部では感染爆発が起こるのではないかと懸念されています。この先いつまで自粛すべきか出口が見えない状況です。この事態に対して、私達は受け身に災いが通り過ぎるのを待つのではなく、積極的に執りうるあらゆる手段を用いて、この災いを乗り切らなければなりません。

まことに主はあなたを救い出してくださる。
鳥を捕るものの網から
死に至る疫病から。
…
あなたは恐れることはない
闇に忍び寄る疫病も、
真昼に襲う病魔も。（詩篇91．3―6）

この詩篇は言うまでも無く、主が助けてくださるから、私達に何もせずに縮こまって災いが過ぎ去るのをやり過ごしなさいと言っているのではありません。「恐れるな」と、主は言われます。しかし、これもまた言うまでも無く、一部のキリスト教徒が主張しているように、神に信頼していれば何の予防策を取らずに今まで通りにしていても大丈夫だと言うことを言っているのでもありません。主は、私たちが適切にこの困難を克服する知恵とすべをすでに与えてくださっています。私たちは、それらを識別し、恐れずに（正しく恐れて）実行するよう求められているのです。この災いを通して、私たちは普段疑問にも思わずに過ごしてきた社会や私たちの共同体のあり方を根本的に見直すよう問われているのかもしれません。教皇フランシスコは仰っています、「今は裁きの時ではなく、私たちが見極めるときです。大切なこととそうでないことを見分け、必要なこととそうでないことを区別するときです。私たちの生き方を立て直し、主よ、あなたと他者に向かわせる時です」と。私たちの生活様式がグローバル化した世界のあり方にあまりに無批判であった事への見直しが指摘されていますが、そのような大局に立った話は別の機会とし、私たちの共同体の身近なあり方も見直す必要があるかもしれません。ミサに与れず、聖体を拝領できない痛みは、一方では聖体の秘跡の意味、一つの神の共同体としてのあり方を実生活で生きているか、考える機会になります。平時であっても、ミサに来ることのできない老人や病人の痛みを共有すること、さらには、彼らのみならず他にも現在の困難な状況にあって、一人で取り残されている人がいるかもしれないと言うことに私達は配慮するように求められています。様々な不便や困難な事態を、他者と協力し合って、自分の為ではなく他者の為のことを思って行動するよう強く意識することが求められています。

今回の公開ミサ等の中止の措置について、秘跡を受ける権利を主張して激しい口調で非難や抗議をしてくる人達がいます。一方では、他教区ですが、通常通りにミサをしていることに、社会的な責任を果たしていないという激しい抗議が寄せられています。どのような選択をしても抗議は寄せられるのですが、私が皆さんにお願いしたいことは、今は、自分個人の信仰の確信を主張して対立を生むときではありません。正しいかどうかは歴史が判断することになるでしょう。今は、個人の信仰の必要のみを考えるよりも、私たちの共同体の中で、この事態にあってどのように連帯し、助け合うことができるかを問うべき時です。その為に、目を外に向けてください。教会内だけではなく、地域社会の中でも、どういう必要があり、私たちは個人として、共同体として何ができるかをさがしてください。私たち一人一人は弱い存在です。そして、疫病に対しても弱い存在です。しかし、私たちが連帯することによってこの困難に立ち向かうとき、主は私たちと共に私たちの中にいてくださり、克服への道を示してくださるでしょう。１日も早く、共同体全員が揃ってミサを祝うことができる日が来ることを願って、自粛の期間中、左の祈りをすることをお願いいたします。

### 新型コロナウイルス感染症に苦しむ世界のための祈り

**いつくしみ深い神よ、**
**新型コロナウイルスの感染拡大によって、**
**今、大きな困難の中にある世界を顧みてください。**
**病に苦しむ人に必要な医療が施され、**
**感染の終息に向けて取り組むすべての人、**
**医療従事者、病者に寄り添う人の健康が守られますように。**
**亡くなった人が永遠のみ国に迎え入れられ、**

尽きることのない安らぎに満たされますように。
不安と混乱に直面しているすべての人に、
支援の手が差し伸べられますように。
希望の源である神よ、
わたしたちが感染拡大を防ぐための犠牲を惜しまず、
世界のすべての人と助け合って、
この危機を乗り越えることができるようお導きください。
わたしたちの主イエス・キリストによって。アーメン。
希望と慰めのよりどころである聖マリア、
苦難のうちにあるわたしたちのためにお祈りください。
（2020年4月3日　日本カトリック司教協議会認可）

## 助祭・司祭候補者認定式、終身助祭候補者認定式が行われる

2020年3月20日（金・春分の日）11時から札幌司教館聖堂で勝谷太治司教の司式で行われた。

新型コロナウイルス感染拡大の影響で、当事者と関係者、地主名誉司教と担当司祭など少人数の司祭の参加のみで行われた。

札幌教区神学生
ペトロ　千葉　充

東京カトリック神学院に入学して早二年が経ち、3月20日に勝谷司教様のもとで助祭司祭候補者認定を頂きました。いつも、お祈りと励ましを与えてくださる皆様へ、心よりお礼を申し上げます。

コロナウィルス感染への対応から、カトリックセンター3階の小聖堂で認定式は執り行なわれましたが、皆様に御参集いただけなかった分、それ以上に強力に祈られていることを、式の中で強く感じておりました。

この道を歩み始め、こんなにも神様は愛して下さっていると感じ、この愛にどのように応えねばならないだろうかと思い惑ったとき、「私が…ねばならない」というよりも、「神様が私を愛してくれている」ということ、そのことに私を委ねていこうとの思いが心に響いてきました。大きな恵みに満たされて、神学院での生活を新たに始めていきたいと思います。

引き続き皆様と祈りのうちに一致しながら、歩んでまいります。

札幌教区神学生
ジョルジュ　桶田　達也

この度漸うと終身助祭候補者認定式に漕ぎ着くことができました。これは偏に、温かくお導き下さいます司教様、細やかにご指導くださいます神学生養成担当の神父様方、励ましのお言葉をおかけ下さる現在・元の主任司祭様方、週に二日間しか居れない年の離れた私に快く隣の席を空けてくれるカトリック東京神学院の神学生の方々、事ある毎にお声がけいただきお祈り頂いてきた小教区の兄弟姉妹の皆様、仕事との両立に心を波打たせる私を叱咤激励し続けてくれている妻等々、皆様の真心の賜物と感謝申し上げます。

終身助祭の起源は多忙な使徒が雑事（日々の分配や食事の世話）を指名した7人に任せた（使徒言行録第6章）こと遡ります。札幌教区にとって、（妻帯）終身助祭の奉仕がどのように生かされるのか。五里霧中ではありますが、神の導きに聞き従い、周りの皆様のお知恵をお借りしながら、与えられた頸木（くびき）をたゆまず、おごらず、ひるむことなく担ってまいります。これ迄のご厚情に改めて感謝申し上げますと共に、変わらぬご指導ご鞭撻の程をお願い申し上げます。

## 聖香油ミサが、司祭団のみで行われる

北海道は広範囲のため司牧的配慮から、聖香油ミサは聖火曜日に行われている。今年も聖火曜日の4月7日11時から、新型コロナウイルス感染拡大の影響で、司祭団のみで行われ、司祭の約束の更新が行われた。

ミサ終了後には、聖香油、洗礼志願者の油、病者の油が各教会に持ち帰られた。

## 「カトリック札幌司教区ハラスメント防止宣言」
### ～ハラスメントのない教会共同体をめざして

カトリック札幌司教区ハラスメント対応デスク

2020年3月13日㈮、札幌教区では3回目となる「性虐待被害者のための祈りと償いの日」を迎えました。残念ながら公開ミサは中止となりましたが、各自がお祈りによって想いを寄せてくださったことと思います。そしてこの日、カトリック札幌司教区では教区の総意として「ハラスメント防止宣言」が発行されました。

「祈りと償いの日」、傷ついた人のために「祈る」ことは多くの人ができると思います。しかし、「償い」はどうでしょう？　性虐待被害者のための償いをどこか他人事に感じてはいないでしょうか？　自分は誰も傷つけていないと言えるでしょうか？

カトリック札幌司教区ハラスメント対応デスク（以下『デスク』）では、2017年12月5日に「聖職者によるハラスメント被害ホットライン」を開設し電話相談にあたる一方で、地区あるいは小教区を訪問し、啓発活動を行ってきました。訪問で感じたことは、実際にお会いしお話を伺ってみる

と、皆さんいろいろな経験をされていること、そして、教会内におけるハラスメントを考えた場合、それは決して「聖職者による」ものだけではないということです。

デスクでは、啓発活動の最後に必ずお伝えしているメッセージがあります。「教会が社会の中で『救いのしるし』となり、弱い立場に置かれている人々を守るという本来の姿に立ち返り、いかなる暴力（被害者・加害者）も生まない教会、誰もが安心・安全な教会であるよう…」

教会は、『救いのしるし』になっているでしょうか？社会の中で弱い立場に置かれている人々を守っているのでしょうか？改めて教会の中で共に考えてみて欲しいと思います。そして、被害と加害の対立性だけはなく、傍観という暴力の肯定的加担をしていないか、自らの行動を振り返っていただきたいのです。償うのは加害者だけではなく、目をつぶり、耳を貸さず、声に出していなかった私たち自身の罪も償わなければならないのです。

デスクは、けっして聖職者を守るために作られた組織ではありません。だからこそ、被害者側の視点にたち、小教区で何ができるのかを一緒に考えていきたいと思っています。デスクが取り組みたいのは、声をあげることができる環境づくりです。ハラスメント防止宣言は、司教、司祭団、男女修道会、及び信徒一同による宣言です。是非この機会に、自分自身の宣言として心に刻んでいただきたいと思います。なお、デスクでは引き続き各地区・各小教区への啓発訪問を行い、「カトリック札幌教区ハラスメント防止宣言」が確実に実行されるよう皆様と共に考え行動していきたいと思います。

## カトリック札幌教区
## ハラスメント防止宣言

**人は神の似姿としていのちを与えられたかけがえのない存在です。その一人ひとりの尊厳は誰からも侵害されてはなりません。教会は、人間の尊厳を踏みにじるあらゆるハラスメントを許さず、カトリック札幌教区はその防止に一丸となって取り組みます。**

私たち札幌教区は、聖職者によるセクシュアルハラスメント及びパワーハラスメントの問題に対応する「ハラスメント対応委員会」を2017年6月に設置、12 月には被害の相談を直接受け付ける「聖職者によるハラスメントホットライン」を設けました。また、教区全体で取り組む意識を育てるために、司祭たちの研修や被害者のための「祈りと償いの日」（四旬節第二金曜日）、各小教区を巡回する啓発訪問を継続的に行っています。

私たちは教会の一員として、これまで教会で起こった性虐待、性暴力によって深く傷つけられた人々に謝罪するとともに、今後はカトリック教会に関わるすべての構成員によるハラスメントの根絶に取り組んでいきます。神が一人ひとりに与えて下さった尊厳、特にもっとも弱い立場に置かれている人たちを守るために全力をつくします。

2020年3月13日

カトリック札幌司教区

司教 勝谷太治

司祭団、男女修道会、信徒一同

## ２０２０年司祭異動

◇２０２０年４月１３日付

●札幌地区

〇新田教会　主任司祭代行　千徳　康雄　師
（函館地区 協力）

※佐藤謙一神父は新田教会主任司祭代行を解任され、教区本部事務局長専任となります。

〇月寒教会　主任司祭　ケネス・スレイマン　師
（月寒・北広島・恵庭・千歳主任）

〇北広島・恵庭・千歳教会
主任司祭　佐久間　力　師
（月寒・北広島・恵庭・千歳助任）
協力司祭　久保寺緑郎　師
（月寒・北広島・恵庭・千歳協力）

※佐久間神父は千歳教会居住となり、久保寺神父は北広島教会居住のままです。

〇北一条・北十一条・北二十六条教会
共同主任司祭（モデラトール）湯澤　民夫　師
（北一条・北11条・北26条主任）
共同主任司祭　松村　繁彦　師（大阪教区）
協力司祭　レイナルド・レガヤダ　師（北一条助任）
協力司祭　ウルバン・サワビエ　師
（原宿分教会、フランシスコ会）

※松村神父は北一条教会居住、サワビエ神父は札幌フランシスコ修道院居住となります。

●旭川地区

〇旭川五条・旭川六条・大町・神居教会
主任司祭　長尾　俊宏　師（名寄・士別主任）
助任司祭　中村　道生　師
（帯広・柏林台・池田・本別 協力）

〇名寄・士別・留萌・羽幌教会
主任司祭　間野　正孝　師
（旭川五条・旭川六条・大町・神居・留萌・羽幌 主任）

※長尾神父と中村神父は神居のフランシスコ修道院に居住となります。間野神父は名寄教会に居住となります。

●釧路地区

〇釧路地区　助任司祭　アルフォンソ・プポ　師
（中華人民共和国）

※プポ神父は釧路の聖アントニオ修道院に居住となります。

●北見地区

〇北見（美幌巡回）・網走・遠軽・紋別教会
共同主任司祭（モデラトール）上杉　昌弘　師
（北見（美幌巡回）・網走・遠軽・紋別 共同主任）
共同主任司祭　川上　剛　師
（北見（美幌巡回）・網走・遠軽・紋別 共同主任、モデラトール）

●教区

〇教区本部　副事務局長　佐久間　力　師
（小教区担当と兼任）

〇北見地区長　上杉　昌弘　師

●教区外へ転出

〇阿部　慶太　師（旭川地区、フランシスコ会）は、六本木の聖ヨゼフ修道院へ異動となります。

# 各地区報告

## ◇苫小牧地区

### クリスマス・いろいろ

シーフェアラーズセンターでは12月14日クリスマスパーティーが行われ、苫小牧教会聖歌隊の皆さんがクリスマスキャロルをプレゼント、20名ほどの外国船の船員さんたちに喜んで頂きました。船員さんたちからはお礼に英語で「きよしこの夜」の歌が披露され、翌日の主日のミサにも数名が参加されました。

東室蘭教会では12月21日、セシリアコーラスチャリティーコンサートが行われました。室蘭市在住の声楽家で指導者、菅原峰子先生と信徒で構成しているコーラスグループの皆さんが、台風19号豪雨災害支援を目的に復興の願いを込め聖堂に素晴らしい歌声を響かせました。グノーとルッツイの「アヴェマリア」や「もろびとこぞりて」などクリスマスソングをメドレーで来場者と一緒に合唱していました。このほかハワイアン・シンガーの石川優美さんが南国のクリスマスソングを披露されました。

伊達教会ではクリスマスイブパーティーにベトナム技能実習生の信者の皆さんが母国語で「きよしこの夜」を歌い、日本人の信徒2名がヴァイオリンを演奏して盛り上がりました。遠くフィンランドから来たサンタさんから子供達やベトナム技能実習生に贈り物（修道院クッキー）のプレゼントもあり、楽しく和やかな時間を共にしました。

（大村千佳）

＝シーフェアラーズセンターのクリスマス会＝

## ◇北見地区

### 3月の様子

北見地区には5つの教会があり、北見・美幌・網走・遠軽・紋別あわせて名簿上信徒数は360人ほどです。北見地区でも、2月下旬から日曜日のミサは中止になっています。5つの教会ともにそうなのですが、紋別にも十数人のベトナム人実習生が熱心にミサに来ています。多くは水産加工関係の工場で働いているために、特に感染への警戒は大きいものがあります。地区の中で一番小さな紋別教会の様子を運営委員長の村田さんから伺いました。

＝和服姿の技能実習生＝

「みんなで集まってミサにあずかることの大切さを思い知らされております。Jさん(英国、聖公会の信徒、時々ミサにいらしてます)から、ミサのスケジュールの問い合わせが何度かありました。札幌司教区のHPから英文の司教様のメッセージを転送しております。ネットのミサばかりなので「乾いています」と彼は言っております。この街の聖公会の司祭も定年で札幌に戻るそうです。この方は、初めてのベトナム人カトリック信者AさんとLさんを車で送り届けて下さった方なので、定年のお祝いと送り届けて下さったお礼にアップルパイを届けました。本当はベトナムの方と一緒に行きたかったのですが、コロナ騒ぎなので、私一人で行きました。ミサの無いこの期間は、ベトナムの信者にはベトナム語の司教様のメッセージと「聖書と典礼」ベトナムカトリックのHPの情報をプリントアウトして届けております。みんな元気で仕事に行っているようですが、ミサがなくてみんなに会えないので「さみしい・・・」と言っておりました。出身のベトナム教会の写真に「みんなのために祈っています」と書き添えて届けました。ベトナム大使館の情報によると、ベトナムでも信徒はミサにいけないのだそうです。Youtubeで見ると、朗読も歌も神学生や修道者と思われる方がしています。

ミサの通常文のベトナム教会で使われているメロディーは西さん（札幌教区難民移住移動者委員会）にお願いして入手できました。ゆくゆくはベトナム語でもできるよう、少しずつ取り組んでいこう思います。まずは同じ言葉が繰り返される「キリエ」がいいと思っています。オルガンの伴奏譜がほしいところです。

主の祈りはベトナム教会でやっているように、高低をつけて捧げたいと考えています。ベトナム語の発音は声調がとても難しいので、会話は困難です。誰かを「通訳」にしてしまうと私たちは便利でしょうけれど、信徒同士の距離感にはよい影響がないと感じます。

紋別教会では言葉が通じなくとも、一緒に「祈る・歌う・飲む・食べる・ゲーム・手伝う」を進めていきたいです。それらはみんな共通のことだからです。

＝北見地区で集いに参加した技能実習生＝

## ◇函館地区

### これからの展望

函館地区は1859年、日本の再宣教のために開港以来、最初に宣教師メルメ・カッションが送られた地域で、今年で宣教161年目を迎えます。1891年には函館教区となり、ベルリオーズ司教が函館元町教会のカテドラルに着座し、北日本全体の宣教の拠点として、紆余曲折を経て発展してきました。現在、函館市内には三つ（元町、宮前町、湯川）、郊外に三つ（当別、江差、八雲）の教会があります。

時代の流れと共に教会の在り方やニーズも変わり、現在、郊外の小共同体には技能実習生としてフィリピ

ンやベトナムからの信者が増加し、小教区に新たな息吹とチャレンジ、希望を与えてくれています。函館市内の教会にも技能実習生が多くなり、多国籍、多文化の共同体の形成が今大切な課題として私たちに与えられています。

函館地区では昨年から「青年交流部」を立ち上げ、これに対応する部門として活動を始めています。青年と謳っている中には、多くの若者の外国人（主にベトナム、フィリピン、その他のアジア地域から）が含まれています。湯川教会を中心にこの活動は活気を増しています。特にこの活動には教会外からの支援や協力を得て、日本語教室や、実習生の諸問題が起こった場合の対応にあたっています。彼らの教会内での存在は、恵みとして、本来のカトリチタス（教会の普遍性）を私たち日本人信者に再確認させてくれています。

また、これからの課題として、宣教する共同体として函館の文脈の中でどのようなことが考えられるのか、ますます熱い議論が求められます。例えば、年間3万人ほどの観光客が訪れる元町教会をもっと宣教の場として生かすにはどうすればよいか。主日のミサの参加者の中にも多くの国内外からの観光客や函館在住の外国籍の方々が見られます。典礼もそれに対応したものに変化させていく必要もあるでしょう。また、元町教会の敷地の効率的な利用の仕方も含めて、観光客のみならず、地域の人々、幼稚園の保護者なども含めて、キリストの福音がどうこだまするのかを考える必要があると思います。近い将来、共同体人数が減った元町教会は、建物をスリム化し、ベルリオーズ司教が作ったルルドまでの新しい道を整備し、巡礼地としての体裁を整えていく。また、160年以上の北日本のカトリック教会の歴史、ひいては、1600年代の蝦夷キリシタン殉教（大千軒岳）の歴史などをも展示しつつ、この地のカトリック教会の歩みを展示する展示室（資料館）、シャルトルの聖パウロ会の日本での最初の歩みとして1878年からの歴史、トラピストとトラピスチヌの歴史なども展示し、観光客や修学旅行生などに見てもらうスペースの確保など、年間3万人にアピールしていく場所として発展させる。また、これらの攻めの宣教には函館の三教会が「ワンチーム」として協力していくことも求められるでしょう。三教会独自の文化を発展させ、切磋琢磨してきた時代から、共に手を携えて、外への宣教のために共に努力する、そういったことが必要となるでしょう。将来的には函館市内の教会は、宣教司牧の面から一つになることも念頭に入れて良いと思います。

「もっとも、わたしが福音を告げ知らせても、それはわたしの誇りにはなりません。そうせずにはいられないことだからです。福音を告げ知らせないなら、わたしは不幸なのです。」（聖パウロのコリントの信徒への第一の手紙9章16節）

この言葉は函館地区の私たちにとって、幸せを求める人々にとって大切な言葉だと思います。福音を告げ知らせないなら、私たちは不幸なのです。皆が幸せになるように、この地にあって私たちのこれからの歩みを共に考え、行動していきたいと思います。

（祐川神父）

## ◇札幌地区

### 札幌地区交流会

2月15日㈯、札幌地区の司祭、修道者、信徒併せて60名がカトリックセンターに集い交流会が開催されました。勝谷司教の講話に続き、六グループに分かれて話し合いが持たれました。主なテーマは、教皇来日時のメッセージや司教年頭書簡の内容からグループ毎に選び自由に語り合いました。終了後には希望者で勝谷司教を囲んで懇親会を開き、盛況のうちに終了しました。ミサや集会が自粛となる中、共同体として一つに集うことができますよう願い祈ります。（上野浩）

＝札幌地区交流会の様子＝

### 『信徒の生涯養成講座』での学び

**知らなかったぁ！　信徒の召命と使命・・・**

札幌地区宣教司牧評議会では、六甲学院の吉村信夫教諭（円山教会出身）を講師に、信徒の養成講座を2019年3月と8月の2回開催しました。その吉村氏を迎え10月12日に北26条教会で『固有の召命』をテーマに、更に発展して1月25日に真駒内教会で『固有の召命と使命…霊的識別と共同識別』をテーマにそれぞれ研修会が行われました。

『召命』というと司祭や修道者の召命を想起しがちですが、本来は〝信徒の召命〟が根源なのです。私たち信者は、洗礼を受けた時点で神からの召命と使命を受けているのですが、十分な学習機会や認識がないのが実態でしょう。神は、「一人ひとり名指しで呼び、そして使命を与える。その使命を果たしていること自体は当然で、決して誇るべきことではない」と言われ、私たちはそれに気付いていないだけなのです。私たちは〝キリスト〟をどのように受け止めているのか、吉村氏が中学生に対して行った〝私のキリスト像〟というプリントを用いて各々探りました。10月にも同様のワークショップを行っていますが、3ヶ月の間に〝私のキリスト感〟に変化が生じている事に気づかされます。また、聖書に記されたキリストの様々な宣教場面についての小グループでの分かち合いでは、同じ個所を読んでも個々人の受け止め方が違うことが分かります。これは「固有の召命と使命」への気づき〝霊的識別〟の一端に近づく一歩となりました。〝共同識別〟は、教会の話合いや会議に非常に効果的に働きます。

これを機に、30数年来求められていた『信徒の使徒職の学び』がスタートし、信者一人ひとりが〝固有の召命と使命〟に更に目覚めるならば、「信徒による教会」「キリストによる宣教共同体」「出向いていく教会」づくりにきっと役立つことでしょう。次の世代に信仰の財産を引き継ぐためにも、このような研修によって、自らが生涯に亘って養成され続ける事を参加者は願っていました。

（高田克彦）

## 新型コロナウイルス感染拡大の影響で教区、地区での会議や行事の中止が続く

世界中で、新型コロナウイルス感染拡大が止まらない事態です。教会でも公開ミサが行われないという初めての経験をなさっていることと思います。

とにかく、感染しないように、感染源にならないようにと苦心して会議や講演会の中止が続いていますし、今後の予定も中止になっています。どこかに出かけたい思いや、集まって一緒に祈ったり、話し合いたいとの思いはあると思いますが、十分注意して、この危機を乗り切りましょう。

そして、罹患者とその家族、医療関係者のためにマリア様の取り次ぎを願って主に祈りましょう。

## 委員会報告

### ◇青少年委員会
### 高校生のイースタービレッジ体験

#### やさしさがくれたパワー

今年も1月2日から11日まで、フィリピン、ミンダナオ島に祐川神父が開設した児童養護施設「イースタービレッジ（EV）」を高校生たちが訪問した。札幌教区から6名、秋田市の児童養護施設「聖園天使園」からも3名が参加した。引率は佐久間神父と私。現地で勝谷司教と祐川神父が合流した。目的は、EVで子どもたちと共に日常を過ごす体験を通して「異文化に触れそれを好きになること」。

＝EV内の川で遊ぶ子どもたち＝

それは、高校生にとってとてつもなく非日常との出会いとなった。バケツの冷たい水をかぶるシャワー、手での洗濯、果物の王様ドリアンの独特な匂いやヒヨコになりかけのアヒルの卵を茹でたバロットなどなど。高校生たちは驚きや戸惑いで大騒ぎはするものの、この目に見える異文化は案外すんなりと受け入れ、大地震の影響でWi-Fiもなく、日本語の通じない環境にもめげず、パワー全開で広い敷地内を子どもたちと駆け回った。

しかしそれは高校生たちに寄り添うEVの子どもたち、大人たちのやさしさがあってこそだ。いつも誰かがやさしいまなざしで見守っていて、一人一人の名前を呼び、手を引いて導いてくれるというのは何という安心感だろうか。英語がわからない、やったことがない＝「ダメ」と、戸惑う心を、瞬く間にほぐしてくれた。音痴な子どもたちだけをエントリーさせたカラオケコンテストもあった。

＝立派なチョンバボイにビックリ＝

日本の大人たちは「ありえないな」と心配して見守った。でも歌い手たちは真剣そのもの。最後まで全力で歌い切り、聴衆（子どもたちとEVのスタッフたち）は大盛り上がりで応援していた。EVはどこまでもオープン。誰でも大きな声で歌っていいんだよ。たとえ音が外れても！これにはカルチャーショックを受けた。誰もがありのままの自分を肯定される世界。それはきっとすごいパワーとなるだろう。

生活を共にする中で異文化に出会う過程は意外な発見に満ち、時に自分たちの在り様についても気付かされたり考えさせられたりする。高校生たちが、この豊かな体験を日々の生活の中で折りにふれ思い出し、価値観への刺激となることを期待したい。

高校生の感想文の一部を抜粋してご紹介したい。

最初に言っておくとみなさんのご想像通りフィリピンには不便な面がたくさんあります。Wi-Fi、洗濯機、シャワー、信号機なんてありません。トイレの便座は取れるしティッシュを流してはいけません。非日常的な生活スタイルを目に、10日間も過ごせるかなぁ、と心配になりました。

でも不思議な魅力があって気付いたら好きになっている。それはきっと現地の人がとても優しいからだと思います。困った顔をしたらすぐ駆け寄って「どうしたの？」と聞いてくれるし、質問したら必ず丁寧に答えてくれます。あとみんなの目がキラキラしていて顔が明るかったことがとても印象的でした。

それから大人も良い意味で子どもらしさが残っているところも心に残っています。食後に突然始まったマジック披露会。何回も繰り返していてもうタネも知っているのに初回と同じように大人も子供も大爆笑！バレーボールで、はるみのメガネが壊れた時も一気に10人以上集まって「大丈夫？」と声をかけていました。そんな姿を見るたびに心があたたかくなって、この感じ好きだなぁと何度も思いました。（後略）

（高校1年　駒井瑠奈）

私が不安に感じていたことは大きく2つありました。1つ目は、コミュニケーションを取る積極性が私には足りないと感じていたことです。私は話し掛けられない限り話さない性格です。これは日本にいる時から顕著に現れていました。そのため、現地の子達と仲良くなれる自信がありませんでした。2つ目は英語が苦手ということです。フィリピンに行く途中の空港で英会話が上手くいかなかった時、「もっと勉強するべきだった‼」と激しく後悔しました。

イースタービレッジに着いた朝、私は不安に押しつぶされそうな気持ちのまま、車から降りました。駆け寄って荷物を持ってくれた子達は、照れたような、緊張してるかのような面持

ちで私達を見ていました。その時、「あぁ、ドキドキしているのは私だけではなかったんだ。」と強く感じました。

その日の夜は歓迎会が行われました。そこで私は初めてイースタービレッジの子達と話しました。同じテーブルに座った子達は私のことを知ろうと、沢山話し掛けてくれました。日本の季節の話や、学校での話。フィリピンの言葉について。色々なことを聞いてくれたり、教えてくれたりしました。英語が苦手な私に、諦めず根気強く説明をしてくれました。そして時にはジョークを言うなど、私の緊張を和らげてくれました。（中略）後々ふと考えてみて思ったことですが、私はフィリピンにいる間「Thank you」と「Yes」と「Sorry」しかほとんど使っていません。それでも気持ちは伝わりましたし、それだけの言葉でも色々なことを話すことが出来ました。この頃には、最初に感じていた言語の問題や、コミュニケーション能力への不安なんて忘れてしまっていました。それはきっと、フィリピンの子達の元気や、優しさのパワーのおかげでしょう。私は自然に笑顔になることができました。（後略）

（高校3年　佐藤胡桃）

＝皆で飛べば怖くない。プールにも遊びに行きました＝

写真満載の報告書を各小教区やカトリック学校へ配布しております。手に取ってご覧いただければ幸いです。

また皆さんもＥＶを訪ねてみませんか？

引率　鳥居明子　記

## ◇カトリック正義と平和協議会

### 札幌教区正義と平和協議会としてスタートします

札幌教区の正義と平和協議会（以下「正義と平和協議会」を「正平協」に）は、これまで教区正平協としての組織はなく6地区担当者会議として集まっていました。その活動は主に札幌地区正平協が担ってきました。そこで今年4月から、教区全体の正平協の活動として行うべく、カトリック札幌教区正平協がスタートすることになりました。

「いつくしみとまことは出会い、正義と平和は口づけし、まことは地から萌え出で、正義は天から注がれます」（詩編85）…カトリック札幌地区正平協は1975年に札幌地区カトリック正義と平和委員会として発足。詩編85の言葉をいつも念頭において、「人間のいのちと権利、そして神の愛と平和をめざし活動をすすめてきました。

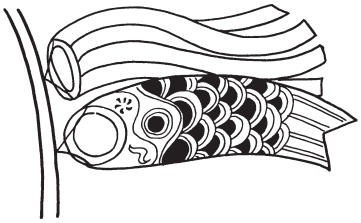
それに先立ち、1967年、バチカンに「正義と平和委員会」が設立、70年には日本でも「正義と平和司教委員会」（4年後に「日本カトリック正平協」に改称）が発足していました。札幌地区正義と平和委員会は、日本カトリック正平協の活動に学びながら、札幌地区の一グループとして、札幌教区、札幌地区宣司評や多くの方々のご支援を受けながら、具体的には平和・憲法擁護、様々な差別反対・人権を守るとりくみを軸に活動をすすめ今日に至っています。

この間、札幌地区の社会活動全般を20年近く担ってきた社会委員会との組織統一を行った（同時に正義と平和委員会を正義と平和協議会に改称）2015年からは、札幌教区6地区正義と平和担当者会議を開催し、毎年50名以上の参加を得て各地域での平和と人権、脱原発などのとりくみの交流を図ってきました。また、日本カトリック正平協の大会や全国会議にも札幌地区以外からも参加し、活動の輪を広げてきました。

こうした経緯を踏まえ、昨秋開催した札幌教区6地区正義と平和担当者会議において、札幌教区正平協に組織変更することを協議。その後札幌教区司祭評議会や顧問会の了承も得て頂きました。

再出発にあたって作成した「札幌教区正平協とりきめ」では、「福音的価値観」を基本に活動をすすめること、具体的には平和・人権・脱原発・環境問題などについての日本カトリック司教団の立場をふまえとりくみをすすめることを明らかにしています。また、年一回各地区の代表者による総会を開催し活動方針を決めるとともに、全道的な活動の交流を図ることにしています。広大な地域を擁する札幌教区において日常的に集まることは困難ですが、可能な限り6地区の連携を密にしていく努力を続けたいと考えています。なお、札幌教区正平協担当司祭には加藤鐵男師、窓口は松永武氏（カトリック月寒教会）が担当しております。

今日、「核戦争一〇〇秒前」と言われる世界的な戦争の危機、それに呼応するかのような憲法9条改正のうごき、様々な人権侵害など「福音」と平和に反する状況がつづいています。こうした状況の克服をめざし、おおくの方々と力を合わせながら、今後も正義と平和のとりくみをすすめる決意です。「和解と平和の道具となり」、「ともに歩むよう求められた」フランシスコ教皇の訴え（広島平和記念公園での「平和のための集い」から）に応えるために。



# 教区の風

## 根室教会のベトナム技能実習生

根室教会　内藤神父

根室教会の主日のミサは9時30分です。しかし毎回、時間通りに始めません。水産加工場で働く信者のベトナム人技能実習生達が来てから始めるからです。多い時で30名ほど、少ない時でも15名前後がミサに来ます。彼女達は、30分から1時間くらいの道を歩いて来ます。雨や風、吹雪の日にも彼女達は歩いてミサにやって来ます。また、工場が繁忙期に入ると、日曜日も仕事になることがあります。そんな時、彼女達は会社に許可をもらってミサに与り、終わると急いで仕事に戻って行くこともあります。このような彼女達を見ていると、とても時間通りにミサを始めるわけにいかないのです。毎回、15分ほど待ち、彼女達がそろってからミサを始めます。他の信者さんも理解してくれます。

＝2019年に馬小屋を作った後に、その彼女たちと＝

根室教会の聖堂は、カトリック幼稚園の園舎の一部にあり、小さな聖堂です。主日のミサには日本人信徒が数名、日本人と結婚している2人のフィリピン人女性が来ます。そこに大勢の若いベトナム人技能実習生が加わります。もはや、多国籍の教会共同体というよりも、彼女達、ベトナム人技能実習生で支えられている教会共同体となっています。

ミサの第1朗読は実習生の1人がベトナム語で朗読します。「共同祈願」と「主の祈り」は、日本語に続いてベトナム語でも唱えています。また去年の夏、彼女達の中にピアノを弾ける女性がいることが分かってからは、ミサの歌伴奏をお願いしたら喜んで引き受けてくれました。このことがあってから、ベトナム語の聖歌を手に入れて、ミサの中で歌ってもらってもいます。

彼女達の奉仕はミサ典礼だけではありません。ミサ後の聖堂掃除、待降節の馬小屋作り、大祝日の準備など、教会の活動の全てに及んでいます。

特に彼女達の奉仕が爆発するのがクリスマスのミサとその後のパーティーです。聖堂に入りきれないほどの実習生がミサに来ます。そしてその後のパーティーでは、各自の手作りのベトナム料理がテーブルに並びます。彼女達は、母国の歌を皆で歌ったり、踊ったりして遅くまで楽しみます。

ベトナム人技能実習生は3年周期で入れ替わります。ここ根室教会でも例外ではありません。しかし不思議なことに、その都度ごとに帰国した人数と同程度の新しい信者の実習生がミサに来ます。そのような時には、ミサの中で皆に紹介します。

日曜日のその日が悪天候でも、ミサに与るために時間をかけて歩いて来るベトナム人技能実習生達・・・。教会の窓から彼女達が歩いて来る姿を待っている間、この教会が彼女達に対して出来ることは何だろうか？といつも考えながら道路を眺めています。少なくとも、母国を離れて生活する彼女達の信仰と憩い（安息）の場でなって欲しいとの思いを抱いて根室に通う日々です。

# 訃報

**※神様のみもとでの安息をお祈りください**

■殉教者聖ゲオルギオのフランシスコ修道会

◇Sr. M・ベルナルダ　佐藤郁子

73年間の修道生活を送り、老衰のため3月28日夕方に新田マリア院において神様のもとに召されました。初誓願後札幌、小樽、北見、青森、新田の共同体で院内の仕事で奉仕し、静かで穏やかな性格で、その優しい笑顔は多くの人を喜ばせました。享年99歳

【略歴】

1920年4月28日　誕生
1940年12月24日　受洗
1947年11月21日　入会
1950年8月12日　初誓願
1955年11月23日　終生誓願
2000年4月29日　誓願金祝

# 編集後記

**今こそ日々祈りましょう**

日本中の教会やその活動で、新型コロナウイルス感染拡大によって、不特定多数が訪れる公開ミサや三密を確保できない集会は中止せざるを得ない状態が続いています。そして、これからも世の中の活動自粛が当面続きそうです。このような状態が続いていくと、「ミサに与れない」「集まれないので何もできない」「どこにも行けない」など段々とストレスが溜まっていくことと思います。

そのような時こそ、日本の殉教者たちの行いを思い起こし、その当時の信徒たちに倣って、三密にならないように個人や小さな集まりを持って、マリア様の取り次ぎを願って神様に祈っていきたいものです。

新型コロナウイルスに罹患している人びとやその家族、医療関係者の人びとのために日々祈っていきましょう。

（編集子）